居心地観察会に行ってきました！　　室 井 隆 良

１「鷹取山」か「シモキタ」か

UR ワンゲル同好会から 9 月に「渡り鳥通信」が届き「まだコロナ禍ではありますが徐々にワンゲルも再開します」と書かれ 10 月 22 日の『鷹取山』の案内が載っていました。最近足の老化が酷くてワンゲルの不参加が続いていためどうしようかと考えていたところに、今度は「まちナビ倶楽部」から 10 月 20 日の下北沢のまち歩きの「居心地観察会」の案内が届きました。

どちらにするか少し迷いましたが急坂を避けた犬の散歩でしか外に出ない日々でしたので、今回は標高 139mの逗子市の山はあきらめて下北沢のまち歩きに参加しました。

1973 年３月に当時の日本住宅公団南多摩開発局でスタートしたワンダーフォーゲル同好会の設立 40 周年記念で登ったのがミャンマー・ビクトリア山、それがきっかけで 2014 年６月の NPO 法人「ふろんてぃあタウン工房」設立につながるのですが、設立の時に色々とお世話になったのが先輩格の NPO 法人「まちナビ倶楽部」です。

では、ふろタン工房のホームページのふろタンインタビューコーナーで 2018 年 12 月 20 日付の第 10 回を覗いてみてください。

「まちナビ倶楽部の居心地観察会」というタイトルで、当時のまちナビ倶楽部理事長の小澤一美さんとまち歩き活動「居心地観察会」仕掛人の桂久誼さんへのインタビューで、「まちナビ倶楽部」前身の「N の会」スタートの２００１年８月まで遡って２００５年６月に NPO 法人「まちナビ倶楽部」になり２００６年から始まった「居心地観察会」について話し合っています。

UR ワンゲル同好会の最初のビクトリア山登山から帰国後「山と共に生きる地域づくり」の取り組みを始めたいと思い、「まちナ倶楽部」にミャンマー部会をつくってもらいたいとお願いしました。最初に相談したのが 2019 年 11 月に亡くなられた三宮さん、「いいよ！いいよ！」と云われたのでその気になって定例会に説明に行ったら活動の違いなどの定款の変更手続きなどあってそう簡単にはいかないというのが全体の意見、ハナシが違うじゃん！と困っていたら、まちナビメンバーの島さんが「応援するから新しい NPO を立ち上げた方がイイよ」と助け舟を出してくれてそういうことになってしまいました。

それで名前も「まちナビ倶楽部」と同じようにひらがな＋カタカナ＋漢字にした「ふろんてぃあタウン工房」の設立発起人総会をワンゲル仲間で開催しました。

不慣れな手続きに手間取って再申請になったりして第２次ビクトリア山調査登山（2014 年３月 14～20 日）には間に合わなくて、設立準備室のままでの行事になりました。

そんな経緯があったことで気を使っていただいたのか、「まちナビ倶楽部」から三宮さんと森角さんが第２次隊のメンバーになってくれて、今でも感謝しています。

２．旧いシモキタ、新しいシモキタを観察する　　桂　久　諠

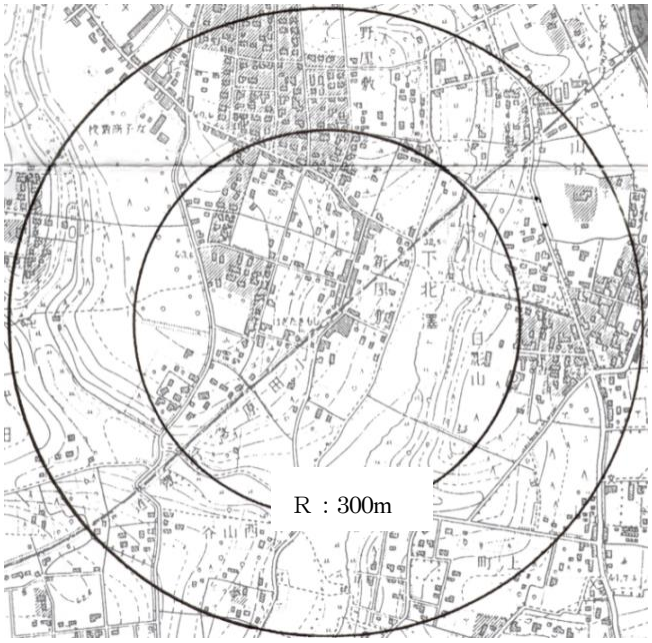
※10 月 20 日のまちナビ倶楽部の居心地観察会の報告レポート前半部分の紹介です。

下北沢のまちは高低差のある複雑な地形の上に展開している。1929(昭和 4)年の地図を見ると、開通したばかりの小田急線しもきたざわ駅南側一帯は水田や畑が多く、この時代の駅周辺ののどかな風景が想像できる。ところが、1933(昭和 8)年京王井之頭線が開通すると、新宿だけでなく渋谷からも利便性が高まり下北沢のまちを大きく発展させる契機になった。

更に後年、1978(昭和 53)年には千代田線からの相互乗りが実現し、下北沢は都心ともつながってまちの発展に大きく寄与することになる。

一方このまちの道路の整備は大変遅れている。ゆるい傾斜のある複雑な狭い道路が入り組んで独特の市街地を形成している。ところがこのような自動車に煩わされない迷路のような道路構造が、歩行者を安心して歩かせる楽しいまちの魅力につながっているようで土曜日の夕方など若者を主体にした大勢の人で賑わっている。

1929(昭和４)年の下北沢



現在の下北沢

小田急線や井之頭線の沿線には幾つかの大学が立地しているが、このような土地柄も若者を集客する一つの要素になっているようだ。

下北沢は古いものと新しいものが同居するまちである。戦後闇市の名残を残した駅前食品市場はなくなったが、南口商店街を下ると今も小さな辻に庚申塚が鎮座しており、まちの周辺には古い神社(八幡神社)や寺院(森巌寺)があり、何故かキリスト教会(下北沢教会・富士見丘教会等)が多い。

駅の周辺には本多劇場や小劇場など音楽や演劇に関わる施設が多く、個性的な各種小店舗や飲食店も並び、適度の喧騒と猥雑さを備えたサブカルチャーが育つ街でもある。

下北沢には何故か「下北沢」という町名はないが、便利な鉄道交通と独特な生活道路という都市構造を備えており、流行に敏感・安価で多様な商品・楽しいディスプレー・気軽に立ち寄れる・美味しい・若い女性が多い等々若者を集客する多くの要素を持っているまちのようである。

まちを歩いていると店舗を改築・改造している現場によく出会う。時代の要求に素早く対応できない敗者と、対応出来る勝者がガラリと入れ替わる新陳代謝が可能なまちの構造がこの下北沢の魅力とまちの強さを維持している源泉ではないかと思う。

下北沢駅を中心にして世田谷代田駅と東北沢駅間が地下化され新しい都市空間が出現した。このような新しいシモキタは、『サブカルチャーの聖地』を継承できるのだろうか？

小田急電鉄(株)の東北沢駅～和泉多摩川駅間複々線化工事(10.4 ㌔)は、東京都の都市計画事業である「連続立体交差事業」と共に工事着工から約 30 年、2019 年 3 月に終了した。

これによって踏切が 39 ケ所廃止され「下北沢駅」や「成城学園駅」は地下駅となり、世田谷代田駅と下北沢駅間は左の姿から右のような風景に一変した。

小田急線地下化前の様子

● 世田谷代田駅～下北沢駅間

10 月 20 日(木)、ひさしぶりに開催したまちナビ倶楽部居心地観察会には 11 名のメンバーが集合した。秋晴れの中、世田谷代田駅から下北沢のまちを目指し元線路敷の緑道を歩き始めた。

初めて来る人はここが元線路敷であったとは思わないだろう。普通の遊歩道であり途中には遊具やベンチがあって樹木も大きい。一般道路と交差する場所はガードパイプでしっかりと安全が図られている。

緑道の途中にご覧のような小料理屋があった。建物の位置は道路敷から外れた位置にあるのだろうか…。

● BONUS　TRACK

「ボーナス トラック」は店舗兼住宅一体型の SOHO4 棟と商業棟からなる新しいスタイルの商店街である。書店、飲食店、レコード店など 13 店が入居している。最近の下北沢は地価が上昇してビルの建替えが進み家賃も上昇してきた。そのため、かつてあった個性的な個人店舗が減少しているという。

そこで、小田急電鉄㈱は下北沢エリア全体の価値を上げることを目標に、若い人たちが自分たちの店を立ち上げていた頃の《下北沢リバイバル》を進めるのだという。

線路沿いに小田急の土地があったことからこのプロジェクトが進んだ。ここが行政の持つ土地なら、多数決的な合意形成が必要になりこのような施設は出来なかっただろうという。

『BONUS　TRACK』は、個人が小商いを始めやすいように一区画 10 坪(住戸 5 坪・店舗 5 坪)の兼用住宅をつくることにした。

若い人が入居し易いような区画設定である。また職住近接の兼用住宅にしたのは、入居し易い環境を生み出すとともに、入居者が自ら住んで当事者意識を持つことがこの場所を育てていくと考えたからのようである。

コロナ禍の影響もあって、生活圏の見直しが進む現在、職住近接と外部空間の活用を目指してきたこの施設は、店舗ごとの判断で徐々にオープンできたという。またここは、近隣の人々がふらりと散歩がてら訪れて公園のように利用することも期待されている。緑道沿いに下のようなレンタルスペース募集の案内が見られた。

※以下略です。続きを知りたい方はまちナビ倶楽部へご連絡を！